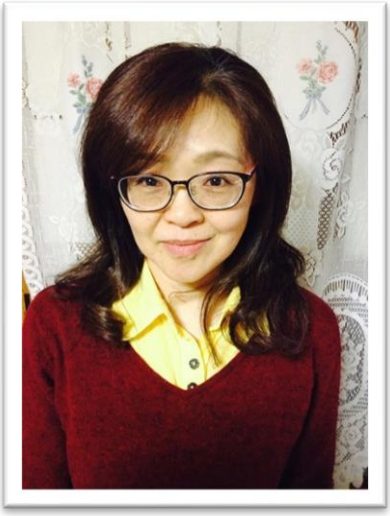
繋がる命を世の中に残したい　夢に向かって走り続ける
～大澤智恵子さん　看護大学教員・訪問看護師～

岩田真弓

私ラッキー★“互いにインタビュー”の組み合わせは同業者である看護師のちえさんだった。ゆきゼミで少しだけ聞いたちえさんのお話に興味がわいた。そして早くちえさんの話を聞きたいと思った私は、ゆきゼミの翌日(4 月 17 日)に早速 ZOOM にてインタビューの続きを行った。ちえさんのテンポよく語る力強いトーンには迷いがない。波乱万丈なちえさんの生き方に、ただただ驚いた。社会の仕組みを作ることができる人―――そう感じた。



看護師のちえさんが、なぜジャーナリズム分野を目指すことになったのか？

彼女の強い思いがそこにはあった。幼少期、ちえさんの周りには身体に特性があり、生活に不自由をもっている子供たちが普通にいた。小 1 の時、足が不自由な子がいて、よくその子と一緒に遊んでいた。初恋だった。このような環境で育ったちえさんには障害というものに対する偏見がなかった。むしろ、まわりの人たちが持っていたことに違和感を覚えた。

「明確に看護師になりたかったわけではない。いい子ちゃんではいられなかった。」 厳格なお父様の型にはめたいという教育から離れて自由に生きたい。そう思ったちえさんは方法を考える。「そうだ看護学校に入学すれば、家から離れることができる。」

中学生の頃、“ねむの木の歌が聞こえる”という映画を観たときに「私はいつかここで働きたい」そう思ったと言う。当然ながら父親には反対されたが、看護師になればいつか働けるのではないか？本音を隠したままであったが看護学校への進学は許された。実習先病院での一人の死にゆく患者さんとの出会いが、ちえさんを看取りの看護へと導いたと話してくれた。「看取りをずっとやって来て、高齢者から最期まで生きる姿をいっぱい教えて頂いた。生命学的に終わってしまう命はあるんだけど、ずっーと語りつながれていく繋がる命もある。繋がる命をいっぱい頂いたからそれを世の中の人に伝えていく役目があるん

じゃないか？」社会に発信したいという思いからジャーナリズム分野の修士課程で学んだ。続けてちえさんはこう語る。「介護保険制度の中で仕事をしてきたが、存続は難しい気がする。介護する人がいない、時代の変化の中で後追いになってきている気がする。年をとったから、介護が必要になったからサービスを組み立ててもらうのではなくて、若い時から自分の老後はこうしたいんだと思う人たちが集まって、自分たちの老後の仕組みを作っていくという実証研究がしたくて……」 博士課程に入学を決めた理由である。地域の中で助け合い、一緒に生きていくために社会の仕組みを作りたい。ちえさんの世の中を変えていきたいという強い思いは生まれながらにして DNA に組み込まれていたのではないか(と感じた)。

学び続けるちえさんの目指すところ

看護学校卒業後は看護師として働いていたちえさんだが、実は彼女 30 以上もの資格を持っているのだ。「訪問看護をしていて、何とかしなきゃと思うたび必然的に身に付けてきただけ」とちえさんはさらりと話す。常に学び続けるちえさんは、看護師という職業だけではとどまれない。自分に足りないものがあると思ったらすぐに行動を起こす。「自分から変わらなきゃいけない。」 同じ地域にあるリゾートホテルに勤めたのは看護師を別の角度から見ようと思ったからである。看護は接遇―ホスピタリティーを学ぶには最高の場所。だが、医師のいないところで具合の悪くなったお客様の対応に自信が持てなかった。アセスメント能力が足りていないと気づき 5 年で辞めた。次に向かったのは米国、ペース大学。短期間で学べるフィジカルアセスメントコースの履修が目的だった。米国から帰国後、2000 年に教育事業や介護の会社を立ち上げる。自分が思い描く仕事をするためには人に雇用されていてはできない。次々に行動に移していくちえさんのバイタリティには驚くばかりである。非常勤講師や訪問看護ステーションの立ち上げなど、支援してきた事業は数知れず。現在は看護学部の教員として看護師の人材育成に携わっている。しかし、ちえさんは決して歩むことを止めない。

【横山大観画伯の旧アトリエをフィンドホーン】として日本に拠点を作る

ちえさんの叶えたい最後の夢だと話してくれた。横山大観画伯の旧アトリエ（築・約 90 年の温泉施設）を、誰でも利用できる癒しの場所として改修した。フィンドホーンはスコットランドで発祥したコミュニティで、“世界中の人が生きる意味を見つけに行く奇跡の場所“だと教えてくれた。癒されたい人たちが癒されて帰ることができる。また、(自分自身が癒され元気になって社会に戻れた体験を通して)今度は人のために何かをしたい、役に立ちたいという思いになる。ここで生きる活力をもらってまた社会で頑張れる。そういう場所を作りたいとちえさんは話す。既に多くの方々が利用して元気になっている。

「日本にフィンドフォーンを作りたい」そう力強く語ってくれたちえさんに迷いはない。いくつもの肩書を持ち常に全力で取り組んでいるちえさんの生き方は、きっとまわりで一緒に活動している仲間にも受け継がれていく繋がる命だと感じた。

===編集後記===

同業者であることで親近感がわき、お話を伺ってびっくり、最後の夢の話を聞いて驚き、自分の進む道が明確でやり遂げるための努力を惜しまないちえさんに勇気をもらいました。ちえさん、貴重なお時間をありがとうございました。

(文責：岩田真弓)

インタビューして

★気付いたこと

- ZOOM というシステムの素晴らしさ！日本とオーストラリアという距離を全く感じなかった事。
- ちえさんのパワーと行動力。
- インタビューの難しさ(昨年に引き続き 2 回目の経験でしたが、緊張感半端ない)。
- 書く事の大変さ。

★楽しかったこと、嬉しかったこと

- ちえさんの最後の夢を聞かせて頂き、私がわくわくしてきた事。
- ちえさんと出会えて、こんな看護師さんもいるんだなと、ちょっと自分との共通点を発見した（私の思い）。
- 自宅よりネット環境がいいからと言ってわざわざ職場まで出向いてくれて、インタビューに臨んでくれたことに感激。
- 同業者(看護師)なので阿吽の呼吸で分かり合える話題があったこと。

★困ったこと

- 事前準備ができていなかったこと。
- 35 分間のインタビューでしたが、ちえさんのお話はとても素敵で、どれも取り上げお伝えしたいことばかりで、「これを書きたい」が多すぎて頭の整理が大変だった。

インタビューされて

★わかったこと

- 決められた時間の中で、しかも 1 度のインタビューで自分の思いを伝えることの難しさ。

★気付いたこと

- 2001 年、移住した当時の事やその時の気持ちを思い出し振り返ることができたことが良かった(20 年も経つと忘れ去られていた)。